



ASLE-Japan / 文学・環境学会

# NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

June 30, 2009, No. 26

## 【役員名簿 (2008-2010)】

代表: 村上清敏 (金沢大学)  
 副代表: 喜納育江 (琉球大学)  
 顧問: 伊藤詔子 (広島大学名誉教授)  
           上遠恵子 西村頼男 (阪南大学)  
 事務局長: 小谷一明 (新潟県立大学)  
 事務局補佐: 岩政伸治 (白百合女子大学)  
               豊里真弓 (札幌大学)  
 会誌: 高橋綾子 (長岡技術科学大学)  
           平塚博子 (敬和学園大学)  
 監事: 生田省悟 (金沢大学)  
 ニュースレター編集委員:  
   横田由理 (広島国際学院大学)  
   木下卓 (愛媛大学)  
   塩田弘 (広島修道大学)  
 会誌編集委員:  
   野田研一 (立教大学)  
   太田雅孝 (大東文化大学)  
   高橋昌子 (三重大学)  
   Daniel Bratton (同志社大学)  
   結城正美 (金沢大学)  
 コンピューターセンター:  
   北国伸隆  
   岩政伸治 (白百合女子大学)  
   山城 新 (琉球大学)  
 評議員:  
   Bruce Allen (清泉女子大学)  
   池田志郎 (熊本大学)  
   石幡直樹 (東北大学)  
   上岡克己 (高知大学)  
   茅野佳子 (明星大学)  
   管啓次郎 (明治大学)  
   高橋勤 (九州大学)  
   巽孝之 (慶応義塾大学)  
   田中恒寿 (札幌大学)  
   辻和彦 (近畿大学)  
   吉田美津 (松山大学)  
 院生代表: 巴山岳人 (和歌山大学 (非))  
 広報: 三浦笙子 (東京海洋大学 (名))  
           大野美砂 (東京海洋大学)  
           河野千絵 (日本大学 (非))  
 研究助成:  
   岡島成行 (日本環境フォーラム)  
   高田賢一 (青山学院大学)  
   乳井昌史 (早稲田大学)  
   山里勝己 (琉球大学)  
   村上清敏 (代表)  
   喜納育江 (副代表)

## 三倍長持ちさせるために

代表 村上 清敏 (金沢大学)

のっけから下世話な話で恐縮だが、また、文学・環境学会の代表としては不謹慎の誹りは免れないとも思うが、「キンチョール」の商業で豊川悦司が迫る究極の二者択一(「三倍長持ち」か「三倍ジェット噴射」か)に対しては、やはり、前者を選びたいと思う。

さる5月30日、2009年度第二回役員会が開催され、幾つかの重要なポイントの変更、あるいは確認がおこなわれた。これらの最終的な承認については、8月末の全国大会における総会の場を待たなければならないが、事前にこの場をお借りして、幾つかの点に絞って報告するとともに、併せて、代表としての気持ちを伝えできればと思う。以下、箇条書きで記憶に残るポイントだけを挙げてゆきたい。

### ①第二回韓日 ASLE 合同シンポジウム

2007年の金沢大会に続いて、今秋ソウルにおいて、標記大会が開催される運びとなり、10名の発表者の方々が増えられた。これに役員等を加えた総勢15名が訪韓する予定であり、今後は最終的な人選、ASLE-Kとのプログラムの調整、今後の展望に向けたASLE-J側からの提案(たとえば、日韓環境文学アンソロジーの出版)などの作業が残されている。沖縄大会、金沢大会に続いて、東アジアの環境文学に目を向け、受信するばかりではなく発信してゆこうとする姿勢は、我々の会としても、これからは継続して持ち続けたいと願っている。無論、こうした姿勢は会のさまざまな活動のひとつであり、会全体としての活動は多様であるべきであって、その動きがひとつの方向に規定されてはならないだろう。

### ②研究活動の相互交換と発信

広報委員の方々から問題提起がなされたのだが、もとはと言えば、代表就任時に委員の皆様へ「会員の活動に関する情報を共有したいのだが、何かかならないか」とお願いし、それを受けて、ニューズレター25号上での研究活動情報提供についてのアナウンスメントにつながったという事情がある。ところが、それに対する反応がはかばかしくない、何か手

だてはないかとの問題提起であった。協議した結果、活動を報告しやすいテンプレートを作成し、再度皆様に情報の提供をお願いすることとなった。正直言って、これで事情が劇的に変化するとも思えず、ある程度時間を掛ける必要を感じながら、同時に、言い出しっぺのひとりとして、あらためて会員諸兄弟のご協力をお願いしたい。ひとつには、180名近くに及ぶ会員の活動状況がある程度相互に把握し合うことは、個々の会員の日常の研究活動にとって有益であるばかりか、会の今後の発展にとっても貴重な情報源となる。また、こうした情報を外に向けて発信することは、学会としての責務のひとつであろうとも思われる。「慎ましやか」とか「含羞」といった言葉が死語になりつつある現在、諸兄弟が大いなる美德の持ち主であることは認めつつ、この際、会の発展のために、そうした美風を一時かなぐり捨てることもお考えいただければまことにありがたい。

### ③院生組織代表からの提言

巴山さんからの貴重な提言が幾つもあった。いずれも若手研究者が会の活動に参加しやすい環境を整えるための提言であり、それをほぼ「丸飲み」する形で、若手研究者のやる気に応えたいというのが、役員会での合意であった。具体的には、a) ジャーナルの執筆、全国大会への参加に対する（ささやかではあるが）経済的な援助、b) 若手の皆様はじめ会員諸氏が参加しやすい全国大会の模索が承認された。このうちの後者については、ニューズレターの前号においてその経緯を述べたのでご参照願いたいのだが、要は、そろそろ全国大会の単独開催に踏み切り、それを東京と地方との隔年開催とし、また、その時期も夏期休暇中を考えてはどうか、との提言である。開催時期に関しては、役員の一部から疑念が提示されたので、夏の総会までに結論を得る方向で前向きに検討することとした。この点に関して、会員の皆様の忌憚のないご意見をお聞かせいただければ幸いである。

私事にわたるが、役員のみならず、名を連ねている幾つかの団体——複数の同窓会や写真愛好者の会——では、出席会員の高齢化が目立ち、もつばらの話題は、病氣自慢であったり、達者でポックリ逝くための秘訣の開陳であったりする。少なくとも我々の会は、いつまでも清新の気に充ちた、談論風発の場であり続けたいと思う。八月末には、野田さんや院生組織のみなさんのお力添えで、初秋の清里高原で全国大会が開催される。いろいろな趣向も盛り込まれているようで今から楽しみだが、この大会が若さ溢れる打々発止の議論の場となるよう願っている。

「三倍長持ち」する方を選びたいというのは、以上のような気持ちからであり、そのための方策を、会員の皆様はじめ役員ともども模索し続けたいと思っている。

## Roads that Feed Our Appetites

Karen Colligan-Taylor

In the southeastern corner of Peru, in Madre de Dios, is one of the most species-rich protected areas on earth—the Manu Biosphere Reserve. Dropping from high altitude tundra, through cloud forests, into lowland rainforest, the park is home to spectacled bear, giant otter, jaguar, 13 species of monkeys, and over 1000 species of birds. The Manu and its neighboring watersheds are also home to a number of indigenous groups—some with minimal outside contact—as well as a source of countless foods, fibers, and potential new medicines. Many species have yet to be discovered. These watersheds in Madre de Dios represent the greatest expanse of undisturbed forest in the Amazon basin, a

tremendous carbon sink that moderates global temperature—but for how long?

Nearing completion, the Interoceanic Highway, connecting the vast soy plantations of Brazil to Pacific ports in Peru, cuts through these biologically rich forests of the Amazon basin and tropical Andes. Where the road crosses from Acre, Brazil into Madre de Dios, Peru we find the intersection of biodiversity and poverty, of diverse natural resources and a lawless frontier. A major impetus for road construction is the transport of soy for export to China, where domestic water sources and agricultural lands have been degraded, and soy now feeds livestock as much as it does people. When, like China, we do not take care of our own watersheds and agricultural lands, we then become dependent on imports from abroad, with little understanding of how our appetites may affect the welfare of other places.

Roads invite further development, extending as far as 25 kilometers on each side. Environmental concerns include illegal logging, hunting and fishing. Forest is burned and cleared for cattle pasture and agriculture. Easy access to new streams and rivers results in increased placer mining in which mercury is used to amalgamate the fine gold. Sluice operations churn through river gravels, causing further deforestation, habitat destruction, and pollution. The influx of workers and speculators is accompanied by the trafficking of women, drugs, and arms.

Those who speak out on behalf of the rainforest are a courageous minority. We all know the name of Brazilian rubber tapper, Chico Mendez, who was killed just across the border twenty years ago while trying to protect his forest, but there are many unsung heroes. Don Julio, for example, a Peruvian community leader in the town of Alerta in Madre de Dios, was shot in the head multiple times on February 26, 2008 for reporting the illegal extraction of mahogany. Don Julio had devoted his life to conservation and developing a sustainable livelihood for his people through Brazil nut collection. Receiving little or no help from their own government, concerned locals often depend on NGOs to assist with the almost insurmountable problems in their region. In Madre de Dios, the Amazon Conservation Association protects vast areas through the establishment of conservation concessions and works closely with communities to develop sustainable economic activities compatible with forest and watershed protection.

(<http://www.amazonconservation.org/>)

How can we help preserve the world's forests and the biodiversity that they host? We can reduce the harvesting and shipping of non-sustainable products from abroad by protecting and properly tending our own forests and farm lands. We can support sustainable forestry and organic farming at home, endeavoring to buy locally and to live low on the food chain. Just think of how much we could grow globally and how much land could be saved from deforestation if we were not feeding corn and soy to livestock! Through our contributions we can help NGOs in the tropics protect forests while alleviating poverty. Consider making a contribution whenever you take a long trip to offset your own carbon footprint. "The greatest challenge of the twenty-first century is to raise



people everywhere to a decent standard of living while preserving as much of the rest of life as possible,” writes Harvard biologist E. O. Wilson (*The Creation*, 6-7). Let us consider this not only a challenge, but a personal responsibility.

Karen Colligan-Taylor (Ph.D. 1985, Stanford University) is professor *emerita*, Japanese Studies, at the University of Alaska Fairbanks. This article is based on a recent trip to the Manu Biosphere Reserve and the Los Amigos Conservation Concession in southeastern Peru. Her most recent book is *Living Japanese: Diversity in Language and Lifestyles* (Yale University Press, 2007).



## レイチェル・カーソンを教える——「環境文化論」講義

上岡 克己 (高知大学)

大学教員にとって専門科目の講義（半年間、90分 x 15回、2単位、受講者数100名以上）を持つことは、宿命とはいえ結構しんどい授業となる。講義ノート作成や配布資料の準備に時間が取られ、大教室でのマイク片手に一方通行的な授業は、精神的にも肉体的にも負担が重くのしかかる。もっとも演習と名のつくものでも、曜日・時間帯によっては50名以上の学生が殺到する場合もあるので、こちらの方も大変といえば大変である。

最近の大学では授業の始まる前に詳しいシラバス（講義概要）を義務付けているばかりか、授業期間中に参観授業の日を設けたり、授業終了時に学生によるアンケートを課すのはごく当然となった。また数年前からは学生による5週目アンケートが実施され、残りの10回の授業を改善するようというお達しまでくる。

以下は2008年度2学期（後期）に行われた私の「環境文化論」講義の概要である。「環境文化論」とは最近他大学でも開講されているが、私たちの文化の中にある環境的要素をとりだして分析研究する学問分野のことで、多田道太郎編『環境文化を学ぶ人のために』には多様な環境文化へのアプローチが見られる。今回の私の授業テーマは、「環境の時代を画したレイチェル・カーソンの環境思想がどのように形成され、発展・成熟していったかを、彼女の伝記や著作を通して考察し、現代が直面する環境破壊にたいしての解決策を考える」というものである。対象学生は2年生以上の人文学部学生。受講学生の大半はカーソンという名前、彼女の著書『沈黙の春』の存在は知っていた。これは中学3年生の英語の教科書にカーソンが登場するからである。しかしながら中学3年生程度の英語のレベルで彼女の思想の真髓に到達するのは無理であり、本講義ではカーソンの初心者念頭に授業を進めることになった。

講義を進める上で問題となるのはテキストのことである（テキストの良し悪しによって授業は左右される）が、ちょうどカーソン生誕100年にあわせて出版した、上岡・上遠・原編著『レイチェル・カーソン』を使用した。このテキストはミネルヴァ書房編集部の意向をうけて、「もっと知りたい名作の世界」シリーズと同じく、執筆者の中に作家を含めること、「コラム」と「心に残る名言」を作成することであった。編者としてはカーソンの人と思想を彼女の著作を通して浮き彫りにすることを念頭に、文学・環境学会会員以外にもレイチェル・カーソン日本協会やネイチャーゲーム協会からの執筆者を迎え、カーソンの全体像に迫るテキストをめざした。テキストは4部、12章構成、I「レイチェル・カーソン



——人・思想・評価」、Ⅱ「レイチェル・カーソンと海の三部作」、Ⅲ「『沈黙の春』——世界を変えた本」、Ⅳ「未来へのメッセージ」で、カーソンの著作を年代順に論じている。

授業では基本的に各章に1回分(90分)をあてることにしていたが、いくらカーソンを研究しているとはいえ、カーソンのすべてに精通しているわけではなく、とりわけ海に関する著作(テキスト第4,5章)や幼児教育からみたカーソン像(第9章)にいたっては当方の知識も少なく、このあたりはテキストの棒読みになってしまい、課題を残す結果となった。そのかわりカーソンの生涯を扱った第Ⅰ部と、カーソンの環境思想の発展が見られる第Ⅲ部は重点的に説明した。第Ⅰ部では、カーソンが自然や環境に関心を持つに至った理由、彼女の運命を変えた人々(スキンカー、ヒギンズ、ドロシー)との出会い、差別や病気と闘いながらも自らの意志で運命を切り開き、真実を探究し続けた自立的な女性と定義する。カーソンの文学的評価としては、カーソンは『われらをめぐる海』でジョン・バローズ賞、全米図書賞を、『沈黙の春』でシュヴァイツァー・メダルその他数多くの賞を受賞しているのにもかかわらず、文学研究の分野では単なる自然史の作家としてみなされ、本格的な研究対象となることはほとんどなかった。しかしながら、エコロジー、環境倫理学、自然保護運動やエコフェミニズムといった新しい学問領域での成果が浸透するにつれて、カーソンの著作にも読み直しが迫られるに至った。カーソンの文学的評価は、人間と自然・環境とをめぐる文学、ネイチャーライティングや環境文学と称されるジャンルの発展によるところが大きいことを説明する。

第Ⅲ部では『沈黙の春』を詳しく解説する。取り上げた章は第1章“A Fable for Tomorrow”、第14章「四人にひとり」、第17章「べつの道」で、特に第14章で描かれた「がんと環境」のテーマに関してはエコフェミニズムや環境正義の視点からの分析を追加した。『がんと環境』の著者スタイングレイバーによるドキュメンタリー映画『レイチェルの娘達——乳癌の原因を探して』を鑑賞し、がんに蝕まれる女性たちのリアルな姿に胸が詰まる。同時に『エコトピアと環境正義の文学』に掲載されているジム・ターターの「さらに川下に生きて——癌、ジェンダー、環境正義——」を読み、がんと環境との関係を考えて。このあたりの分野は文系出身の当方では深入りはできないが、2008年がちょうど食品偽装や農薬汚染の問題が噴出した時期とも重なり、学生にとっては身近に感じられたかもしれない。

第Ⅳ部では『センス・オブ・ワンダー』の解説を行ったが、この第Ⅳ部では作品からの引用が多い第11章高田宏『『センス・オブ・ワンダー』をめぐって』からはじめ、続いて9章、10章へと進めた。第10章『『センス・オブ・ワンダー』とネイチャーゲーム』は、ネイチャーゲームを知らないと教えづらいかもしれないが、資格は私でも取れるので是非会員にはお薦めする。私は前々から小学校教員を目指す学生には是非ネイチャーゲームを体験してほしいと思っている。テキスト146ページにあるマイクロハイク(ネイチャーゲームのアクティビティのひとつ)を楽しむ少女の眼差し、および資料として配付した『ネイチャーゲームでひろがる環境教育』124ページにある「大地の窓」のあどけない少女のつぶらな瞳こそ、「センス・オブ・ワンダー」の真髄であると思う。「センス・オブ・ワンダー」に関して、私はいつもワーズワスの「虹」の詩を翻訳つきの英文で詠むことにしている。

私の心は躍る、大空に/ 虹がかかるのを見たときに。/ 幼い頃もそうだった、/ 大人になった  
今でもそうなのだ、/ 年老いたときでもそうありたい、/ でなければ、生きている意味はない!  
/ 子供は大人の父親なのだ。/ 願わくば、私のこれからの一日一日が、/ 自然への畏敬の念  
によって貫かれんことを!

なお『センス・オブ・ワンダー』は日本で映画化されているが、出演者・語りの上遠氏が映画化の際にNHKのインタビューに答え、かつ映画の10分程度の紹介がなされているビデオは、教える上できわめて効果的であった。授業の最終回は、テキストの第12章「失われた森——解毒の文学」をまとめ、カーソンのシュヴァイツァー流「生命への畏敬の念」と、彼女独自の成熟した環境倫理を紹介した。なお「環境文化論」の授業を終える際にいつもしていることがある。それはThink Globally, Act Locally.を板書し、Globallyをアルド・レオポルド流に解釈し、「地球という惑星の身になって」自然や環境にことを考えてほしいと語って授業を終える。

授業を終えての感想は、『センス・オブ・ワンダー』にある「教えることは感じることの半分も重要ではない」に尽きる。カーソンに関する膨大な知識を教授するのが我々の役割だとしても、むしろカーソンを熱く語ることが重要に思えてくる。カーソンが差別の中で、病との闘いの中で必死になって綴った真実の言葉、いわばカーソンの未来世代へのメッセージを熱く語ることこそ私たちに課せられた使命だと思う。その点「心に残る名言」は役立った。

配布資料・使用ビデオリスト

カーソンの著作から、

「私の好きな楽しみ」、「海のなか」、「ネイチャーライティングの意匠」（邦訳は「自然を描く意図」、『失われた森』）、「島の誕生」（『われらをめぐる海』）、「A Fable for Tomorrow」 「四人にひとり」、「べつの道」（『沈黙の春』）

参考文献から

井田徹治『ウナギ 地球環境を語る魚』、ゴア『『沈黙の春』の序文』、『不都合な真実』、スタイングレイバー『がんと環境』、スロヴィック他編著『エコトピアと環境正義の文学』、降旗信一『ネイチャーゲームでひろがる環境教育』、ブルックス『レイチェル・カーソン』、文学・環境学会編『たのしく読めるネイチャーライティング』、リア『レイチェル——レイチェル・カーソン「沈黙の春」の生涯』

ビデオ

『それは DDT から始まった——化学物質の 20 世紀』（60 分）、『人間ゆうゆうシリーズ、自然と語り合うこと、レイチェル・カーソンの遺言、映画『センス・オブ・ワンダー』より』（30 分）、『100 人の 20 世紀 レイチェル・カーソン』（20 分）、『レイチェル・カーソン』（75 分）、*Rachel's Daughters: Searching for the Causes of Breast Cancer* (108 分)

## ベティさんのパーマカルチャー (Permaculture) プロジェクト

喜納 育江 (琉球大学)

カリフォルニア州バークレーでの住まいを提供してくれているのは、日系（奄美系）絵画アーティストの友人、ベティ・ノブエ・カノウさんである。青年期だった 60 年代を、学生運動で騒然としていたバークレーで経験し、今もその時代を風靡した名だたる活動家たちと友人関係にあるツワモノである。今年 97 歳になるお母さんのエルシー・フジコ・オガタさんと二人暮らしたが、帰米二世のそのお母さんの、その歳にしての足腰の強さは超人的としか思えない。生花の先生で、今も週 2 回は花屋に生花の仕事をしに行く。「仕事じゃなくて遊びに行くのよ」と上品な日本語でそう言って明るく元気に笑う。その姿は「かわいい」というよりは「豪快」に近く、「ツワモノ」を超える日本語の表現を思わず探してしまう。



そのベティさんが最近、カリフォルニア・アフリカ系アメリカ人ミュージアムが主催する「明日という思想 (An Idea Called Tomorrow)」という展示に向けて始めた制作プロジェクトが、パーマカルチャーである。「パーマカルチャー」を辞書で引くと、「自然農法」、「持続可能な農業」と出てくる。つまり、ベティさんの

自宅の裏側にあるけっこうな広さの畑をパーマカルチャー型の菜園に大改造するというプロジェクトなのだ。ベティさんの家の裏にある戸建てのアパートに引っ越してきたとき、敷地内のガーデンの広さと、育っている果樹や野菜の種類にずいぶん驚いたが（レモン、トウモロコシ、フダンソウ、苺、ブラックベリー、洋梨、びわ、梅など）、ベティさんは忙しくて思うように手入れする時間もないらしく、去年は「もう長いこと放つてある」と言っていた。

ところが、今年の春は違った。3月のある朝、突然ベティさんから電話がかかってくる、「今からバークレー市の堆肥をもらいに行くけど、運ぶのを手伝ってくれない？」と言う。バークレー市は毎週家庭から生ゴミを回収していて、それを堆肥化し、月に一度のペースで無料配布しているのだ。配布場所のバークレー・マリーナ（海浜公園）へ行くと、すでにたくさんの市民がスコップや袋を持って集まっていた。トラックでもらいに来ている人もいて、私たちが来たころにはもうだいぶなくなってしまっていた。

そのとき初めてベティさんがこれから始めるパーマカルチャープロジェクトについて話してくれた。カリフォルニアが気候的に農業に適しているわりには、水の確保に苦慮していることは知っていたが、今年は特に雨季である冬の降水量が少なく、乾季となる夏の間の水不足が心配されていた。だから、一滴の水も無駄にはできないという思いで、私も畑への散布用として日頃から台所やシャワー室で洗剤を含まない水を溜めていたが、彼女の今回のパーマカルチャーの菜園では、雨水を溜めて散布するシステムを構築するらしい。そして、できた作物はみんなで分ける。金融危機下のアメリカだからこそ、コミュニティで食べ物を分かち合うことの大切さを学ぶのだ、とベティさんは熱っぽく語った。

大統領選では、熱烈なオバマ支持者だったベティさんにとって、ファースト・レディのミシェル・オバマがホワイトハウスの敷地に「勝利の菜園」なるヴィクトリー・ガーデンを作ったことも嬉しいニュースだったようだ。



ミシェル・オバマは、子供たちに新鮮な野菜や果物を供給できているか、食物がどのように食卓の上に出てくるのかなど、国民はもっと食育に関心をもつべきだと訴えた。ホワイトハウスにおけるこの変化に一役買ったのが、「食べられる学校菜園 (Edible School Garden/Yard)」という運動を推進してきたアリス・ウォーターである。アリス・ウォーターは、世界的に有名なバークレーのオーガニックレストラン、シェ・パニーズ (Chez Panisse: <http://www.chezpanisse.com/>) のオーナーであり、環境教育と食育の重要性を訴える手紙をオバマ大統領の就任早々ミシェル・オバマに送っていた。実は同じ趣旨の手紙を、クリントン大統領時代に、ヒラリー・クリントンにも送っていたが、効果がなかったらしい。しかし、ミシェル・オバマはアリス・ウォーターの提案の重要性を理解し、実現させたというわけである。

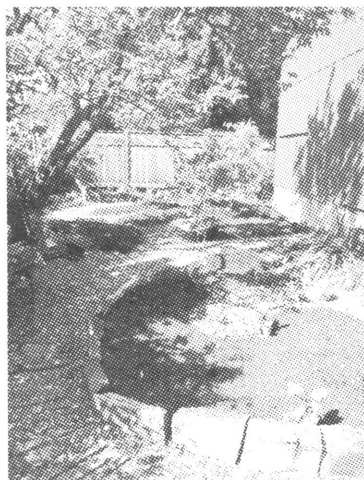
\*\*\*\*\*

ベティさんのパーマカルチャープロジェクトには、こうしたアリス・ウォーターのような料理人を生んだバークレーという場所がもつ独特の文化が背景となっていることも確かだ。市が行う家庭からの生ゴミリサイクルと堆肥化、肥料の無料配布もその一例だが、ほかにも、バークレーにはエコロジーセンター (Ecology Center: <http://www.ecologycenter.org/>) というNPO組織があり、環境やフェアトレードに配慮した製品や、関連図書を販売しているほか、環境に関するさまざまなイベント情報を提供し、バークレー市民の環境運動への参画を促す場として機能している。センターへ行くと、「有機農業とは?」「身体マップ～化学物質と身体汚染」、「環境に配慮した害虫退治法」などといったトピックの無料配布用チラシがたくさん置いてあり、生活に即した、しかも科学的に信頼できるこうした情報を提供することによって、環境問題に対する市民啓蒙活動にも重要な役割を果たしていることがうかがえる。また週に1度市内の各所で開かれる、すべてがオーガニックのファーマーズマーケットもこのセンターの管轄下にある。少々高い値段でも、少々形が崩れていても、安全で



おいしいオーガニックの野菜や果物を買おうという市民で毎週にぎわっている。また、パークレー市との契約で、9 世帯以下の建物から出る家庭の生ゴミの回収も行っていると、エコロジーセンター職員のフミコ・フランセス・カワモトさんが教えてくれた。

話をベティさんのプロジェクトに戻そう。ベティさんのプロジェクトには、リベラルなパークレーの文化以外に、彼女の日系、奄美系としての文化が反映されている。環境政策の勉強をするために日本の大学院で勉強した娘さんの影響もあるようだが、ベティさんが試みているパーマカルチャーの基本となっているのは、日本の福岡正信が提唱した「自然農法」の思想と実践であるとのこと。それはともかく、おもしろいと思ったのは、ベティさんがこのプロジェクトをアフリカ系アメリカ人ミュージアムと関連づけて、彼女の「芸術」として表現しようとしていることだ。とはいえ、アフリカ文化に由来する農法でもなく、アフリカで育つような植物をつくるわけでもないので、最初は関連性がよくわからなかったのだが、ベティさんによると、「土着の思想」というのが基本なのらしい。アフリカ系アメリカ人にとっては、アフリカ、ベティさんにとっては奄美という、正確には亡くなったお父さんの故郷だが、ベティさんの心の中にも確かに存在する故郷への憧憬を意味する。つまり、今存在しているアメリカという場所で、その土と接触し、その生態系と調和することによって、土着する身体感覚を取り戻す。(ベティさんに言わせれば、自分の内にある石炭に火を点すような、「呼び起こす」という感覚なのだそう。) そうやってつくられた畑は、故郷への憧憬が形になったものである。もうひとつ言えば、ベティさんのお母さんの家系のように、カリフォルニアで主に農業や園芸



芸と関係してきた日系人の歴史も込められている。農業 (agriculture) も、園芸 (horticulture) もパーマカルチャーも、人間の創造行為という点では「文化」には違いないが、本質的には、自然との交感なしには成立しない文化であるはずなのである。

屋久島の自然と共に生活を営む中で、数々の詩を生み出した山尾三省、カリフォルニアで桃の農家をしながら思索し、文章を書くデイビッド・マス・マスモトなどの文学も、自然と文化のボーダーで創造される芸術という点では、ベティさんのパーマカルチャーと通底している。そこには「土着」することと「生活」することと「思索」することが一体となることによって営まれる「芸術」がある。「芸術」とは何か。「環境」とは何か。そして、「文学」とは何か。その問いに対する私たちの答えがまだ近代的思考に囚われている既成概念なら、それを壊すところから始めなければならない。

## 「桜ソング」

相原 優子 (武蔵野美術大学)

ここ数年、春になると、「桜」を歌った J-ポップスをよく耳にする。こういう歌を「桜ソング」と呼ぶらしい。厳密な定義があるのかしら、とインターネットで検索してみると「一般的にテーマやタイトルに『桜』とある楽曲」とある。「桜」をテーマあるいはタイトルにした曲の相次ぐヒットに便乗した音楽業界が、売り上げ促進の為に発明した造語であるということも付け加えられている (Wikipedia)。この拍子抜けするようなシンプルな説明を読む限り、この音楽ジャンルのネーミングに特別厳密な条件など無く、単に「桜」を歌った曲の総称らしい。出典として挙げられているホームページを覗いてみると、「桜ソング」現象について「結局、「桜ソング」が愛聴されている間は、「人々の心が荒んでないぞ」ってことなのだろう、きっと。」という風に軽く締め括られている。つまり、この現象は、若干の商業的な戦略を潜ませてはいても、極めて



牧歌的で無害な一介の歌謡曲ブームであり、人に桜を慈しむだけの心の余裕が生まれてきた……という  
ことなのかも知れない。

このテーマについて色々想いを巡らせていると、ふと萩原朔太郎の「桜」という詩を思い出した。

桜のしたに人あまたつどひ居ぬ／なにをして遊ぶならむ。／われも桜の木の下に立ちてみたれども／わが  
こころはつめたくして／花びらの散りておつるにも涙こぼるのみ。／いとほしや／いま春の日のまひる  
どき／あながちに悲しきものをみつめたる我にしもあらぬを。／

この詩のペルソナは、桜の木の下に集って楽しそうにしている人々を、何か違和感のようなものを抱えな  
がら、一人離れて、ボンヤリと眺めているのだろう。不思議なことに、このペルソナの心情が、「桜ソング」  
を前にした私の心情と似通っていることに気付く。特に白けているわけではないけれど、桜を歌った曲を聴  
くと、「ちょっと待てよ」という気持ちになる。

今ほど、ポップスの中で「桜」が歌われた時代はなかったかも知れない。ホームページに掲載されている  
「桜ソング・ランキング」に登場する曲のほとんどが、21世紀に作られたものであることから、「桜ソング」  
ブームというのは、極めて21世紀的現象であると言ってもよいだろう。それにしても何故今の若いアーテ  
ィスト達は、こぞって「桜」だけを歌うのだろうか。春には、桜の他に、色々な花々が出現する。梅、桃、  
菜の花、木蓮、堇など。それなのに、「梅ソング」「桃ソング」というジャンルは生まれえないのだ。

先日、この現象について、私よりも一回り年齢の若い人達に尋ねてみた。「桜」には、他の花にはない胸  
を「キュン」と切なくさせるものがある……という返事が返ってきた。この「桜」による「胸キュン」  
が個人的心情であるならば、人によっては、梅や桃や木蓮にもキュンときていい筈である。しかし、何故「桜」  
にだけ「キュン」と来るのだろうか。ということは、「桜胸キュン」は、自然発生的な感覚というよりも、  
むしろ「教育された」レスポンスなのではないか、ということに思い当たる。それも長い時間かけて知らず  
知らずの内に、刷り込まれて来たものなのかも知れない。

日本文学史上、「桜」が歌のテーマとして最初に台頭してきたのは平安時代なのだそうである。『万葉集』  
でも、もちろん桜は詠われたものの、詠われた数では、梅や萩に及ばなかった。しかし『古今和歌集』の時  
代には、桜は美と愛を象徴する花として「絶対的地位」を確立していたという。そして「日本古代の上流階  
級は中国から伝わった梅の花を讃美することに夢中であったが、これに対し、平安時代から日本人が自分  
たち独自の花として選んだのが桜であった。日本人はそれ以来ずっと桜の花を『日本に特有』のものとして位  
置づけてきた。」(『ねじ曲げられた桜』大貫恵美子著、岩波書店、2003年、17頁)。このように、桜とい  
う花が、歴史的に、「日本人とは何か」という national identity を形成する上で大きな役割を果たしてき  
たと考えれば、この「桜胸キュン」という感覚は、「日本人」としての「私」の中に強く喚起されるもの、と  
言えるのかも知れない。春になると桜の開花予想と桜前線がニュースの一つとして流される国は日本だけだ  
ろう。私達が愉しみにしている桜のお花見が、国民的一大イベントになっていること等を考慮すれば、桜が  
「日本人」の私達にとっては「特別な存在」の花であることは否定できない。ここまで来ると、必然的に日  
本国が、「桜」という花に押しつけてきた「軍国主義日本の象徴の花」という不幸なレッテルに想いが至っ  
てしまう。そのイメージを増幅させて国民を扇動した当時の唱歌や歌謡曲の果たした負の役割についても、  
考えることを避けては通れない。

しかし、時代は21世紀である。「桜ソング」を作った若いアーティスト達の歌を、意図的に日本の不幸な  
歴史と照らし合わせて解読するのが妥当とも思われない。彼らの書いた歌詞には、日常生活の中でふと感じ  
る細やかな心の変化や、大切な人との別れや新たな出会いが詠われている。そこでまた、私は立ち止まって  
考えてみる。人間が歴史の影響から逃れることが出来ないとすれば、私達の感性には当然何らかの歴史の痕  
跡が刷り込まれている筈である。数年前から大ヒットを記録している代表的な「桜ソング」の一つの歌詞を  
読んでみた。おそらく、卒業式の場面が詠われているのだろう。別れを惜しみ、再会を誓う、という内容で  
ある。その中の幾つかの言葉、「刹那」「散りゆく運命(さだめ)」「惜別」「またこの場所で会おう」……に

思わず反応してしまう。これらの言葉の選択の背景には、どうしても歴史的な文脈を感じてしまう。穿った見方をすれば、作者は、「桜」が引き起こすある種の「陶醉」、特有な「センチメント」を聴き手の中に喚起する効果を巧妙に狙っているという意図すら感じられる、というのは言い過ぎだろうか。このことが意識的なのか、無意識的なのか、作り手にも分からないということになると、これはちょっと深刻である。

日本に於いては、歴史的に、「桜」には、色々な意味やイメージが押し付けられてきた。「桜」を歌うこと、聴くことは、「桜」に付与された歴史的な文脈と向き合うことを意味する。何故、今「桜ソング」なのか。これは、現代日本社会のある側面を映し出している、と言えるかも知れない。私達は、「桜」が私達に投げかけるメッセージを真摯に注意深く読み取らなければならない、と思う。桜は文句無く美しい。それ故、私達は一層「桜」との出合いを意識化しなければならない、という warning がどこからか聞こえてくるような気がする。これらのことを留意しつつ、これからも、毎年、新たなる「桜」との再会を楽しみ続けていきたいと思う。

今年の春は、巷に流れる「桜ソング」を聴きながら、こんなことを考えてみた。

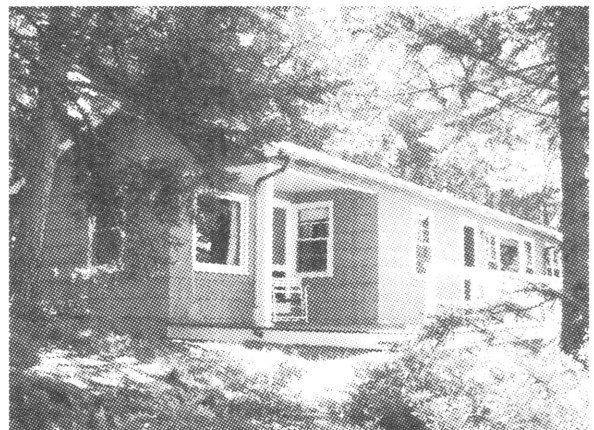
## カーソンの別荘を訪ねて

浅井 千晶 (千里金蘭大学)

レイチェル・カーソンの研究、特に海に関する作品の研究に着手して以来、メイン州にある彼女の別荘を訪れたいと思ってきた。ブースベイ湾のすぐ西、ウェスト・サウスポート島の海を臨む小さな別荘で、彼女は『海辺』(*The Edge of the Sea*, 1955)を執筆し、養子にした Roger を連れて海辺や林を歩き、珠玉のエッセイ『センス・オブ・ワンダー』(*The Sense of Wonder*, 1965)を生み出したのだから。

2008年6月、メイン州ブースベイで開催された NEW-CUE (Nature and Environmental Writers-College and University Educators) 主催の第5回 Environmental Writers' Conference in honor of Rachel Carson に参加することにより、その機会が訪れた。ブースベイはメイン州の中心都市ポートランドから海岸沿いを北に車で1時間ほどのブースベイ湾を中心にした海岸町である。夏には観光客でにぎわい、海辺の町らしく観光用小冊子には日々の干潮と満潮の時刻が記されている。大会会場となった Spruce Point Inn はその名のとおり、針葉樹のトウヒ (spruce) が生い茂る一角の、海に面した絶好のロケーションにあり、約90名の大会参加者はここを拠点に四日間を過ごした。

大会プログラムとは別に今回非常に楽しみにしていたのは、カーソンの別荘を訪れることである。カーソンは1946年の夏をブースベイで過ごしてこの地に魅惑され、作家として成功をおさめた後、1953年、サウスポート島の波が岩に砕ける音が間近に聞こえる場所に、平屋の別荘を建てた。現在はカーソンの養子 Roger Christie が所有し、別荘を借りることもできるので、2001年に公開された映画『センス・オブ・ワンダー』はここで撮影されている。ちょうど大会参加者の一人で、*A Natural Sense of Wonder: Connecting Kids with Nature through the Seasons* (University of Georgia Press) を出版したばかりの Rick Van Noy 一家が滞在中で、彼らの好意で家の中も案内してもらうことができた。別荘は青味がかかった灰色の壁面の目立たない佇



カーソンの別荘 (筆者撮影)

まいで、林のなかにすっぽり納まっている。中に入ると、居間には大きな窓があり、樹々に縁どられて海が見える。屋内からでも潮の満ち引きを感じることができそうだった。居間の書棚にはたぶん Roger のものだろう新しい本や、各国で翻訳されたカーソンの著作が並び、日本語の『センス・オブ・ワンダー』も置いてあるのが嬉しかった。Rick Van Noy の奥様 Catherine が、背の高いキャビネットの扉を開けて、彼女の発見を教えてくれた。扉の端に刻み目があり、Roger, Ian という名前と数字が記されているのだ。Roger はおそらく幼子の頃からここに来ていたカーソンの養子で、背の高さを測っていたのだろう。「日本と同じ習慣があるのだ、名前を書いたのはカーソン自身かもしれない」と思うと、彼女の精神が宿っているように感じた。

カーソンが執筆していた書斎は少し奥まった場所にあり、前がテラスになっていた。書斎から外に出ると岩肌を真下に降りてすぐ海がある。干潮に向かう時刻だったので、岩づたいにあちこち歩くことが可能で、小さな生物が観察できた。名前はわからなくともそれだけでわくわくするものだ。



(Rick Van Noy 氏提供)

一方、玄関から林側へ出ると鳥の声が遠くから聞こえ、Carson Lane と名付けられた小道にはアツモリソウの薄紫紅色の花が群生していた。静謐な空間で、初夏らしい光景だった。

大会プログラムに組まれた午後のアクティビティーは、メイン州の海洋学実験所や地元ブースベイの環境保護団体の協力により、ハイキングや植物園のガイドツアーを始め、潮だまりの探検、灯台のあるバーント島への遠足、カヤックによる島巡りなど、海に面した土地らしいものが多い。私は、カヤックに初めて挑戦し、ブースベイ湾を中心に島巡りをした。といっても、一人乗りでは自信がもてず、参加者一人で NGO の Ocean River Institute を運営し、カヤックに乗り慣れた Rob Moir と二人乗りで出発した。好天に恵まれ、波も比較的穏やかな日だったが、湾から大西洋へ漕ぎ

出でるといきなり波が高くなったり、ブースベイとサウスポート島を結ぶ橋の下をくぐり抜けたりする難所もあったので、Rob には感謝、感謝だった。彼は生物の生態にも詳しく、アオサギが水辺に佇み、白鳥やカモが水面を泳ぎ、ミサゴが空中を舞う、カーソンが『潮風の下で』(Under the Sea-Wind, 1941)で描いた世界を眼前にして、興奮した。海ではアザランが顔を出したのも一瞬見え、人間の様子をうかがっている風なのが興味深かった。

筆者は大会三日目に Literary Figures and the Environment と題されたセッションにおいて、“Two Perspectives on the World of Animals: Tarka the Otter and Under the Sea-Wind” というタイトルで、カーソンが着想段階で影響を受けたイギリスの自然作家 Henry Williamson のカワウソの冒険小説『かわうそタルカ』(Tarka the Otter, 1927)と『潮風の下で』の共通点と相違点に着目して、動物の擬人化をめぐる両者の差異を論じた。会場には、通常はメリーランド州のウォード美術館に保管されている、Howard Frech による『潮風の下で』初版の挿絵の原画が展示されており、展示の統括をした John Juriga による Frech の挿絵の特徴とカーソンの意図の解説があった。生誕 100 年版の『潮風の下で』には初版の挿絵が復活しているが、濃い青の線の原画をつぶさに観察でき、貴重な経験だった。大会にはカーソンの詳しい評伝を著した Linda Lear も部分参加しており、カーソンに興味をもつ人間にとって実にぜいたくな時間だった。

詩人や作家が多く参加する大会の特色で、三日目の夜には自作(の一部)を次々と皆の前で読むセッションがあり、くつろいだ雰囲気の中、思いをこめたそれぞれの声を聞くにつれ、しだいに聴衆が盛り上がっていった。大会最終日は、飛行機の時間の都合で朝早く出発することになり、残念ではあったが、カーソンを肌身で感じた充実感を胸に帰路についた。NEW-CUE 主催の大会は、ASLE-US 大会と重ならないように隔年で開催されており、次回(2010年)が計画中である。

## 日本脱出、そして放浪

西村 頼男 (阪南大学)

今ではK・T・ヤマシタの小説で有名な「ぶらじる丸」で私が横浜港を後にしたのは1965年12月31日午後4時だった。音楽はもちろん「蛍の光」。日本に戻ることは全く計算しないでこの移民船に乗った私は25歳だった。数日前に神戸港で乗船したために親族や友人との別れはすんでいた。しかし今、横浜港で今生の別れを惜しんで手を激しく振る岸壁の人々の姿を目にしたとき、「これで本当に日本とお別れだ」と胸を熱くした。この船は名前が示すとおり、移民をブラジルおよび他の南米諸国に送り込むことを使命としていた。1960年代から70年代前半には「ブラジル・ブーム」があったこともあり、3分の2は南米へ向い、LAで下船したのは3分の1だった。

後で思うと私はLAに上陸する前にポスト・アメリカを考えていたことになる。船内の図書室で小田実のベストセラー『なんでも見てやろう』を見つけ、すぐに読んだからである。この本で1日1ドル(360円)でヨーロッパをヒッチハイクできることを知り、それをずっと覚えていた。ミシシッピで修士課程を終えるとマンハッタンで資金を稼いで、68年6月にアイルランドへ飛んだ。ヨーロッパではユース・ホステルが役立ち、ほとんどヒッチハイクで移動できた。日本へはできるだけ地を這うことにした。イギリスーオランダーフランスードイツースイスーイタリア(ペルーシアには短期間滞在した)ーギリシア(エーゲ海の美しさは忘れられない)ートルコーイランーアフガニスタンーパキスタンーインドータイー香港。トルコからインドまでは鉄道とバスを使った。1日1ドルでの旅行は無理だったが、世界の広さを実感した。2003ー04年にブラジルに行ったとき、私より1年前に「ぶらじる丸」で移住した日系人と会って驚いた。20歳代で身に染み込んだ癖は今日も消えず、「片雲の風にさそはれて、漂白の思ひやまず」というところである。



## 報告：アメリカ詩人ジェーン・ハーシュフィールドの詩の朗読会

高橋 綾子（長岡技術科学大学）

ゲアリー・スナイダー氏より推薦を受けたアメリカ詩人ジェーン・ハーシュフィールド氏を平成 21 年 3 月 27 日東京に招聘する幸運に恵まれた。ハーシュフィールド氏はカリフォルニア州在住であり、仏教、東洋文学とアメリカ文化の融合、つまり環太平洋的な想像力を特徴とする。ケネス・レクスロス、ウィリアム・カルロス・ウィリアムから、ゲアリー・スナイダーへと続いてきた系譜の中にあり、環太平洋文学に属する詩人である。仏教徒であり日本文学に精通した詩人であるが、意外にも今回が日本初来日となった。シンポジウムを開催するにあたり、ハーシュフィールド氏とシンポジウムで使用するテキスト作りから着手した。詩人は 13 篇の詩をシンポジウムのために撰詩し、筆者が翻訳し「ジェーン・ハーシュフィールドー詩の朗読会とワークショップ」というバイリンガルテキストを準備することができた。彼女が収めた序文では、彼女の人生における日本文学と文化への親密な関係が述べられている。詩人が 8 歳の頃、最初買った本は翻訳された日本の俳句の本だった。18 歳のとき、大学で翻訳された平安時代とその他の時代の短歌、『源氏物語』、能、紀行文、枕詞本、俳句を読み、日本文学・文化を理解するために、二十代の 8 年間で禅の修行に費やした。三十代においては、グッゲンハイム財団からの基金を得、日本人の協力者であるアラタニマリコとともに一年間、小野小町と和泉式部の詩歌を英語に翻訳し、その成果を *The Ink Dark Moon: Love Poems by Ono no Komachi and Izumi Shikibu, Women of the Ancient Court of Japan*(1990)として出版し、二人の稀有の詩人と短歌形式をアメリカの広範囲の層の人々に紹介した。四十代には、日本の詩歌と翻訳についての構造を研究し、エッセー集 *Nine Gates: Entering the Mind of Poetry* (1997)というタイトルで出版した。ごく最近では、芭蕉や彼がアメリカの作家や読者に与えた影響の重要性についてアメリカ中を講演旅行するようになったこと、こうして、日本はハーシュフィールド氏の人生のすべてに深く関わりあっていることが述べられている。

シンポジウムは彼女の詩の朗読と講演と質疑応答で構成された。質疑応答では、多数の熱心な意見が寄せられ、シンポジウム終了後もハーシュフィールド氏への質問が 1 時間余りも絶えなかったほどだった。参加者の反応は極めて良好で、アメリカで著名な詩人と直接質疑応答をすることができたことは喜びであったという感想が寄せられた。ハーシュフィールド氏が、この日本講演旅行により詩人としての資質をさらに高めることとなったと語っていたことは印象的であった。

ASLE-J 金沢国際シンポに招聘したスナイダー氏に続く世代のアメリカ詩人を招聘できたことは喜びである。彼女は仏教徒としてディープエコロジーの精神をもち、森羅万象との親和性を詠う詩人である。環太平洋文学の今後の可能性を先導する詩人であり、今後研究者として彼女の作品を紹介していきたい。



## 現代ネイチャーライターの横顔 (11)

## 「レズビアン文学」と「環境文学」が出会うところ

——シェリー・モラガに学ぶ——

松永 京子 (広島修道大学・非)

…how will our lands be free if our bodies aren't?

Cherrie Moraga

2005年冬、ネブラスカ大学のバーバラ・ディバナード教授の計らいで、「レズビアン文学」の授業を聴講する機会に恵まれた。「レズビアン文学」とは何か——レズビアンによって書かれた文学なのか、あるいはレズビアンについて書かれた文学なのか——といったディスカッションから始まり、エイドリッチ・リッチ、オードリー・ロード、ドロシー・アリソン等の作品を「レズビアニズム」の視点から読み進んでいくなかで、受講者は極めて個人的な問題にぶつかることもあれば、意見の対立から激しい討論へと発展していくこともあった。豊富な授業内容には、ラップ・パフォーマンスの披露や作家ドロシー・アリソンとの親睦会も組み込まれ、至れり尽くせりのなんともドラマティックな授業だった。多くの参加者にとって、長い間心に残り続ける特別な授業となったに違いない。少なくとも私にとっては、忘れられない授業の一つとなった。

この授業を聴講してからずっと、「レズビアン文学」はどのような形で「環境文学」の領域と交わりうるのかについて考え続けてきた。ドロシー・アリソンは、労働者階級出身であることがいかにレズビアンとしての彼女の人生に影響を与えてきたのかを語っていたし、オードリー・ロードはセクシュアリティの問題がジェンダーや人種の問題と複雑に絡み合っていることを教えてくれた。人間社会の構造的力関係やその矛盾を経糸に、そして個人の心理的・身体的葛藤も含んだ人間ドラマを緯糸に織りなすダイナミックな文学的タペストリーともいえる「レズビアン文学」は、自然保護や自然と人間の関係に関心の深い「環境文学」と比べて、より人的あるいは社会的な関心の強い文学であるように思えたのだ。はたしてこのような文学を、エコロジカルな視点から「読む」ことは可能なのだろうか。この問いに対する答えを見つけるきっかけを与えてくれたのが、シェリー・モラガの作品だった。

シェリー・モラガといえば、グローリア・アンサルドゥーアと共に「第三世界フェミニズム」の草分け的役割を果たした *This Bridge Called My Back* (1981) を編纂したチカーナ・フェミニスト、あるいはチカーナ・レズビアン作家としてご存知の方も多いただろう。アクティヴィスト、詩人、エッセイスト、劇作家としても活躍するモラガは、詩や散文を集めたエッセイ集 *Loving in the War Years* (1983) から戯曲 *Watsonville: Some Place Not Here* (1996) に至るまで、様々なジャンルの作品の中で、チカーナ・レズビアンの幅広い経験を描き続けてきた。モラガはチカーナ・レズビアンが日常生活で直面する社会の抑圧構造の矛盾を浮き彫りにしながら、長い間その存在を否定されてきたチカーナ・レズビアンの身体や欲望を可視化する。モラガ作品の根底にあるのは、女性であり、チカーナであり、レズビアンであることだ。けれどもモラガにとって、ジェンダー、人種、セクシュアリティといったアイデンティティ・ポリティックスは、汚染され、破壊されていく大地の問題と無関係ではなかった。

「苦しみで身悶えする」ブドウの木。次々と癌にかかって死んでいく子供たち。頭部だけの姿で生まれ育った17歳の少女セレジタ。これらを主要登場人物とするモラガの *Heroes and Saints* (1994) は、特に1970年代から80年代にかけて多くのメキシコ系農場労働者が被害を受けてきた農薬汚染の問題を描いた戯曲である。この作品の中でモラガは、汚染された土地と死んでゆく子供たちの苦悩をイエス・キリストの苦悩と見立てる一方で、汚染によって肉体とセクシュアリティの自由を奪われたセレジタの姿を、慎ましい自己犠牲の女性像としてセクシュアリティを否定されてきた聖母グアダループの姿と重ねる。さらにグアダループ

と一体化したセレジタは、モラガの手によって、メキシコ系インディアンの豊穡の母神へと書き直され、汚染反対運動の民族的指導者へと変貌していく。伝統的メキシコ系文化では、自己のセクシュアリティを享受する女性は「民族の裏切り者」とみなされ、レズビアンであるかどうかにかかわらず、否定的な意味合いにおいて「レズビアン」と称されてきた。モラガはセクシュアリティを否定されてきたチカーナや聖母グアダルルーペを、女性の想像／創造力やセクシュアリティを重視する母系先住民文化のコンテクストから捉え直すことで、抑圧されてきた土地とともに広い意味における「チカーナ・レズビアン」を解放しようと試みているのだ。

モラガにとっての土地は、国家や領土を作り上げる岩、木、動物、植物だけにとどまらない。「私たちが働く工場」、「子供たちが飲む水」、「私たちが住む家」もまた、土地の一部なのだ。またモラガは「女性やレズビアンやゲイにとって、土地は私たちの体と呼ばれる物質的な塊」であると主張することで、土地の権利を実際にそこに住む人々の権利、女性の権利、ゲイ・レズビアンの権利、個人の肉体の権利へと敷衍する。

「私たちの肉体を解放することなく、どうして大地が解放されようか」—モラガのこのレトリカルな問いかけは、肉体やセクシュアリティを含めた人間、あるいは人間社会が、大地と一続きにあることを再確認させてくれる。そしてこのような問いかけがなされるまさにその瞬間、「レズビアン文学」と「環境文学」が出会うのだ。

Moraga, Cherríe. *Heroes and Saints & Other Plays*. Albuquerque: West End P, 1994.

---. *Loving in the War Years: Lo que nunca pasó por sus labios*. Boston: South End P, 1983.

---. *The Last Generation*. Boston, MA: South End P, 1993.

---. *Watsonville/Circle in the Dirt*. Albuquerque: West End P, 2002.

Moraga, Cherríe, and Gloria Anzaldúa, eds. *This Bridge Called My Back: Writings by Radical Women of Color*. 1981. New York: Kitchen Table, Women of Color P, 1983.

[Asle-J-Grad 報告 No.6]

## 〈わたし〉とネイチャーライティングとしての短歌

もりたけいたろう (立教大・院)

ボクはなぜ「短歌をする」のだろうか？答えは簡単、ストレスの捌け口だからである。ひょっとしたら、名だたる歌人の短歌も彼らの（敢えて彼ら、と言っておこう）ストレスの記録であったのかも知れない。

論文作成はストレスの溜まるお仕事である。3年前、修士論文の執筆中、セミプロの歌人である母の手ほどきを受け、ストレス解消にボクは立て続けに短歌を詠んだ。30の手習い、であった。

梅雨の間の風吹き荒れる街角でふと立ち止まり身を委ねてみる  
ひとり身の孤独に耐える力なく人待つふりする梅雨の改札

眠れずに起きて眺める暗闇に光は見えぬ短夜は行く  
我のみを信じて生きてきたけれど祈るしかないのか短夜白む

見覚えのある面影に振り向いて立ち止まってみる木枯らしの駅  
独りでも生きていけると強がりつつイブの夜空にサンタを探す

最初の2句のテーマは「梅雨」、真ん中の2句は「夏」、後の2句は「秋冬」だった。短歌はストレスの解消

に役立ったが、そのときはなぜ自分が〈自然〉を詠み込んだのかは分かっていた。

その後、2007年の夏、金沢でASLE日韓合同シンポジウムが開催された。その初日、「日韓環境文学における自然の詩学」というセッションで同席させていただいたのが日本大学（当時）の河野千絵さん。自身が短歌のような雰囲気醸し出す河野さんの発表「築地正子の短歌一個の自然・孤の自然」を拝聴したときに受けた衝撃を忘れられない。短歌もネイチャーライティングになりうるんだ、と。〈自然〉を詠み込むことで、「短歌」は「短歌」自身を離陸 take-off し、ネイチャーライティングへと軟着陸 soft landing することを河野さんは明らかにしてくれた。

その後、シンポジウムをきっかけに河野さんとメールで何度かやり取りをさせていただく中で、雑誌『短歌研究』の1992年2月号が「歌で環境は守れるか—エコロジー短歌の視点」という特集を組んだことを知った。その特集の最初の扉ページには次のように書かれている。「歴史的に、文学は、素晴らしい自然を表現することによって、人々の関心を引き起こし、結果的にはその自然を守ることに役だって来ました。[中略] 環境問題が騒がれている今、残すべき自然をテーマに「さまざまな歌人の短歌を集めた」特集を組みました」。ネイチャーライティングとしての短歌の誕生の瞬間であった。ちなみに同特集には敬愛する岡井隆の歌も含まれていた。岡井の歌には自然が多く詠み込まれていることには気づいていたが、そうか、彼もネイチャーライターだったんだ。

その後、河野さんの発表は、合同シンポジウムの発表を収録した『「場所」の詩学』（2008年、藤原書店）に同名のタイトルで論文として収められた。その中で河野さんは歌人・伊藤一彦の以下の発言を引いている。「自然や季節をどう掌握するかの問題は、そのまま掌握する側の自己の問題に他ならない」（p. 57；「自然の回復」『歌壇』1987年10月号）。柄谷行人も同じようなことを言っていたが、なるほど、ボクが短歌に〈自然〉という他者を読み込んだのは、自分を見失いがちなストレスフルな生活の中、他者を通じた〈わたし〉探しの試みだったのだ。

ストレスが過剰な現代社会、閉塞感を感じたら〈自然〉を詠み込んだ短歌を一首、詠んでみてはいかがだろうか。ストレス解消になるばかりか、完成した作品にはあなたが予想だにできなかった別の〈わたし〉が見つかるかも知れない。

#### お知らせ

院生組織のメンバー3人（巴山岳人・山本洋平・森田）が、小谷一明先生（新潟県立大学）、結城正美先生（金沢大学）と一緒に、今夏、清里で開催される文学・環境学会でセッションを企画しています。タイトルは「ローカリティ・グローバリティ・プラネタリティー—環境文学研究における新たな場所論へ」。以下、応募の際の要旨です。「本ラウンドテーブルは、様々な文学作品における場所又は環境の表象について、特に脱中心性や脱境界性といったテーマを中心に考察することにより、エコクリティシズムにおける場所論に従来とは異なった視点を導入することを試みるものである。従来のエコクリティシズムにおいては、作家と特定の土地との関係に注目しながら文学作品における環境意識を探るという傾向が強く、逆にそうした場所との共感の欠如は、近代の生み出した病として批判されてきた。しかしながら万物のネットワークというエコロジカルな思想には、特定の場所とのつながりを越えた関係性が内包されていることは明らかである。また近年様々に提起されているグローバリズムや『帝国』にまつわる議論では、国や地域といった場所に留まらない『惑星的』思考の必要性が示されている。こうした観点はローカリズムにのみ眼を向けがちであった環境文学研究に接続されることで、新たな方向性を生み出していくと考えられる」。企画が無事に通過した際にはぜひ皆さんにもラウンドテーブルにご参加いただき、忌憚のないご意見をいただければ幸いです。刺激的な討論、生産的な意見交換を楽しみにしています。



## ASLE-Japan 分科会報告

## META サークル

電子メールのメーリングリストを利用してエコクリティシズムや環境文学に関する情報・意見交換等をおこなっている。そのなかで、次のようなプロジェクト化につながる動きがあった。

- ・ 全国大会での発表の企画：エコクリティシズムにおける〈場所〉への着目をグローバリズムの観点から批判的かつ理論的に再検討する Ursula Heise 著 *Sense of Place and Sense of Planet* など最近の研究書に触発されたかたちで、グローバリズムとローカリズムを大テーマとするシン

ポジウム等を全国大会でおこなうことが提案された。ちょうど院生組織でも類似のテーマで報告が企画されており、合同でラウンドテーブルを申請し、実施することとなった。

- ・ 環境文学作品リストの作成：『たのしく読めるネイチャーライティング 作品ガイド 120』刊行から約10年が経ち、情報の更新が求められると考え、とくに最近の作品のリストアップに重点をおくかたちで作品リストの作成に取り組み始めた。  
(文責：結城)


 書評

書評 Sideris, Lisa H. & Kathleen Dean Moore eds., *Rachel Carson: Legacy and Challenge* (State University of New York Press, 2008)  
浅井 千晶 (千里金蘭大学)

生誕100年を記念して、2007年にはRachel Carsonに関する書物が日米で刊行された。周知のように、日本では編者をはじめ文学・環境学会会員が8名執筆に参加した、上岡克己・上遠恵子・原強編『レイチェル・カーソン』がミネルヴァ書房から出版された。カーソンの生地アメリカでは、第一作 *Under the Sea-Wind* (1941) の生誕100年記念版が、初版の序言を付しHoward Frechによる挿絵でPenguin Classicsとして、作家・科学者・アクティヴィストが各人の立場でカーソンの人生と業績を称えるPeter Matthiessen編、*Courage for the Earth: Writers, Scientists, and Activists Celebrate the Life and Writing of Rachel Carson* がカーソンに縁の深いHoughton Mifflin社から出版された。他に環境運動の中にカーソンを位置づけたMark Hamilton Lyle, *The Gentle Subversive: Rachel Carson, Silent Spring, and the Rise of the Environmental Movement* (Oxford University Press) や児童・青少年向けの伝記等もあり、カーソンに一定の評価が与えられていることが確認できる。

2008年に出版された本書 *Rachel Carson: Legacy and Challenge* は、「遺産と挑戦」という題が示すように、カーソンの仕事の遺産とそれが現在に突きつける課題を論じる17本の論文が収められている。本書の端緒となったのは2002年にオレゴン州立大学で開催された連続セミナーだが、編者たちは他の多くの成果を取り込んでいる。例えば、最初の論文Terry Tempest Williamsの“One Patriot”は、2001年9月11日の同時多発テロを受けて出版された *Patriotism and the American Land* (The Orion Society, 2002) からの再録である。詩人のように書いた科学者、倫理の提唱者、男性が科学を支配していた時代の女性であり、癌と闘いつつ環境汚染について執筆し、自然の美と神秘に感動する個人であったカーソンの多面性を反映し、本書は第I部 A Legacy of Activism and Advocacy、第II部 Ethics on Land and at Sea、第III部 Reflections on Gender and Science、第IV部 An Ongoing Toxic Discourse、第V部 A Legacy of Wonderの5部構成をとる。カーソンのどの側面に興味を持つ人でも得るものがあるが、「ニューヨーク州立大学環境哲学と倫理シ

リーズ」の1冊である本書は倫理に関する論考がとくに充実しているので、少し紹介してみよう。

Philip Cafaro は、哲学者が求めるような形式上の概念枠組をもたないにせよ、最初の著作から一貫して非-人間中心主義(non-anthropocentrism)であり、人間が自然に対して負う道徳的義務を明示した点でカーソンは環境倫理学者であると指摘する。Susan Power Bratton の論文と J. Baird Callicott and Elyssa Back の論文は、ともに、Aldo Leopold が *A Sand County Almanac* で提示した「大地の倫理」と比較・対照することで、カーソンの作品中にある「海の倫理」を定置しようと試みている。Bratton は海中に人間が定住することがない事実を踏まえ、想像力を駆使して生物移行帯(ecotone)を超える海の倫理を提示し、Callicott and Back はカーソンの描く海洋世界に「他者性」や「差異」というポストモダンの概念を見出す。

最後に、Sandra Steingraber が第 IV 部の“Living Downstream of *Silent Spring*”において、深刻な環境問題に対して無力感を抱き絶望しがちな我々のために、発癌性化学物質に食料・工業製品の生産を依存する現状から方向転換するために様々な職種の間ができることを、力強く具体的に列挙していることを述べておきたい。

### 書評 Bell Hooks, *Belonging: a Culture of Place* (Routledge, 2009)

吉田 美津 (松山大学)

ベル・フックス (bell hooks, 1952-) は、日本で「ブラック・フェミニスト」として知られている。彼女はアフリカ系女性として、人種とジェンダーそして階級について鋭い文化批評を展開してきた。1980年代に出版された著作の翻訳には『ブラック・フェミニストの主張一周縁から中心へ』があり、その後『フェミニズムはみんなのもの—情熱の政治学』や『とびこえよ、その囲いを—自由の実践としてのフェミニズム教育』などの邦訳がある。

Routledge 社から出版された *Belonging* は、ケンタッキーへの帰郷を契機にアフリカ系と土地をめぐる歴史的な関係を考察し、彼らの「帰属の感覚」を土地とのエコロジカルな関係にみいだそうとしたエッセイ集である。子ども時代に親しんだ自然と人びととのつながり、そしてそこでの祖父母たちとの素朴な生活をフックスは「帰属する文化」と呼ぶ。『ブラック・フェミニスト』でみせた「革命的」なフェミニズムを *Belonging* に見ることは難しい。しかしながら、2000年代に発表された著作、たとえば *All About Love: New Visions* (2001), *Salvation: Black People and Love* (2001), *Communion: The Female Search for Love* (2002) などの表題だけを見ても、フックスのフェミニズムの射程が広がっている印象がある。そのひとつは、彼女の教育者としての一面である。*Teaching Community: A Pedagogy of Hope* (2003) は、共同体の精神を教えることの大切さを説いている。

フェミニズムの理論家、批評家、そして教育者というフックスのこれまでの経歴を視野に置くと *Belonging* は、故郷南部の大地を背景にアフリカ系の新しい自己認識を提唱する書である。彼女は序文で、人種と階級の政治学を考えながら、「黒人」(フックスは一貫してブラックを使用している)の自己発見とエコロジーの関連を展開したいという。スタンフォード大学入学のために故郷を去ったあと、フックスはようやく自身のなかに南部山岳地帯の自由な気風と信仰、そして「黒人文化」が培われたケンタッキーこそが彼女の帰るべき「故郷」だと理解したことを語る。彼女は現在ケンタッキーにある Berea College のアパラチアン研究科の教授である。Berea の町には反人種差別の伝統があるという。また自然とのあるべき関係については Wendell Berry に学んだという。エッセイには彼のインタビューの章もある。Berry の *The Hidden Wound* に感銘を受けたフックスは、人種差別を「心の無秩序」と捉える Berry の考えを敷衍し、大地にたいする私たちの関係もこの「心の無秩序」で蝕まれているという。大地から切り離されたアフリカ系も「心の無秩序」を内面化しているのではないだろうかと問う。したがって、フックスにとって「集団的な黒人の自己発見とエコロジーの運動」には深い相互関係がある。彼女は曾祖母たちのキルト作りの伝統とその芸術的価値を語り、アフリカ系で最初の環境主義者であるという George Washington Carver について語る。

フックスは土地への倫理観とそれに根ざした共同体が、人種による軋轢を乗り越えると示唆する。「わたしはWendell Berryのように、自尊心が他のグループへの優越感からではなく大地との関係から生まれるような共同体を作ること、そうすることによって人種を乗り越える世界を希求することができると信じる。」アフリカ系と自然の関係は「反田園主義」として論じられることが多く、彼らの生活は主に都市のゲットー化において考察されてきたといえる。一方、フックスは南部の大地とアフリカ系の絆を再確認することで、「帰属への感覚」を再定義しようとしている。フックスの試みが具体性をもつのかどうか議論の余地はあるが、彼女にとってケンタッキーは大きな希望の地であることがよく理解できる。*Belonging* は、人種、階級、ジェンダーをめぐるエコロジー的考察のひとつの可能性を示している。



2009年度 ASLE-Japan / 文学・環境学会第15回全国大会を清里で開催します。

日時： 2009年8月29日(土)～31日(月)：2泊3日

会場： 〒407-0301 山梨県北杜市高根町清里3545 山梨県清里高原清泉寮本館

Tel: 0551-48-2111 / Fax: 0551-48-2099 e-mail: [seisen-f@keep.or.jp](mailto:seisen-f@keep.or.jp)

[大会プログラム]

第1日目 8月29日(土)

参加受付、チェックイン 13:00～15:00 【本館ホール】

役員会 13:30～14:30 【ハンターホール】

開会の辞 村上清敏(代表: 金沢大学) 14:50～15:00

基調講演 15:00～16:30 司会 野田研一(立教大学) 【本館ホール】

“Japan and the Culture of the Four Seasons: Secondary Nature, Social Difference, and the Illusion of Harmony”  
講師: ハルオ・シラネ氏 (コロンビア大学教授)

1951年、東京生まれ。コロンビア大学博士号取得。日本文学・比較文学専攻。現在、コロンビア大学東アジア言語・文化学部教授。著書に、*The Bridge of Dreams: A Poetics of the Tale of Genji* (日本語版『夢の浮橋 源氏物語の詩学』)、編著に『創造された古典』などがある。近年、エコクリティシズムに基づく日本文学の読み直しを進めている。(近刊)

ラウンドテーブル1 16:40～17:50 司会 巴山岳人(和歌山大・非常勤講師)

「ローカリティ・グローバリティ・プラネタリティ: 環境文学研究における新たな場所論」

発題者: 小谷一明(新潟県立大学)、森田系太郎(立教大学・院)、山本洋平(立教大学・院)、結城正美(金沢大学)

ナイトハイク 19:00～20:00 (オプション: 1時間 参加料800円)

——清里の夜の世界にそっとおじゃまします。夜ならではの音やにおいを感じ、自然を体感します。自然と向き合い、自分とも向き合える時間です。

懇親会&「とっておきの1冊」 20:00～22:00 司会 岩政伸治(白百合女子大学)、山本洋平

第2日目 8月30日(日)

総会 9:00～9:30

研究発表1 9:40～10:40 司会 管啓次郎(明治大学)

1 中村優子(立教大学・院)「なぜそれは、例えば「空」なのか?: マンガの「間」の特殊性とそこに描かれる自然についての一考察」

2 Daniela Kato(東京工業大学) “Goddesses, Whores, Hags and Maidens: Images of Female Nature in Contemporary Women Sculptors and Land Artists”

研究発表2 10:50～11:50 司会 波戸岡景太(明治大学)

1 豊里真弓(札幌大学)「見えない視線を暴くとき: *All the Powerful Invisible Things* における境界線と選択」

2 玉山ともよ(総合研究大学院大学・院)「雑誌『人間家族』が遺したもの、そしてこれから」

自然体験プログラム 13:00～15:00 (オプション: 2時間 参加料1,600円)

——五感を活用して清里の自然を楽しみます。皆さんの感性を大いに発揮して森で過ごします。「西の魔女が死んだ」のおばあちゃんの家にもおじゃまします。

**シンポジウム** 15:20~16:30 司会 管啓次郎

「Walking: 歩行という経験」パネリスト: Daniela Kato、宇野澤昌樹 (明治大学・院)、フランシスコ・ガルシア (明治大学・院)、伊藤貴弘 (明治大学・院)

**研究発表3** 16:40~17:40 司会 高田賢一 (青山学院大学)

- 1 森田英津子 (白百合女子大学・院) 『赤毛のアン』における森
- 2 佐藤有紀 (立教大学・院) 『武蔵野』再考: 独歩における自然観の連続性

**ワークショップ** 19:00~20:00 司会 茅野佳子 (明星大学)

「アイヌ民族に「環境正義」を: 環境文学研究における新たな場所論へ」講師: 長谷川修氏 (レラの会会長)

**交流会** 20:00~22:00 司会 森田系太郎

**第3日目 8月31日 (月)**

**研究発表4** 9:00~9:30 司会 結城正美 (金沢大学)

- 1 岩井洋 (酪農学園大学) 「L. ハーンの世界感覚と近代的視覚の問題」

**ラウンドテーブル2** 9:30~10:30 司会 松岡幸司 (信州大学)

「大学の環境教育における環境文学について」発題者: 川嶋直氏 (キープ協会・立教大学)、岩政伸治 (白百合女子大学)

**閉会の辞** 10:35 小谷一明 (事務局幹事・新潟県立大学)

**【会費納入のお願い】**

(6月送付の全国大会案内に振込用紙を同封しております) 会費未納の方は、至急、下記郵便口座へお振込みください。(一般5,000円、学生2,000円)

**口座番号 01300-0-93821 加入者名 文学環境学会**

他の金融機関からゆうちょ銀行の振替口座へ振込ができるようになりました! なお振込の際は、以下の項目を指定する必要があります。

**銀行名** ゆうちょ銀行 **金融機関コード** 9900 **店番** 139 **店名** 一三九店 **当座** 0093821  
**受取人名** プンガクカンキョウガッカイ

**【寄贈図書】**

次の図書を学会に寄贈していただきました。お読みになりたい方にはお貸ししますので、事務局までご連絡ください。なお、送料はご負担ください。

・『グリーンライティング—ロマン主義とエコロジー』ジェイムズ・C. マキューシック、川津雅江、小口一郎、音羽書房鶴見書店、2009。

**【編集後記】**

今回は、海外から国内から、ASLE-J会員の日頃の多彩な活動を伝える興味深い記事が数多く寄せられました。お忙しい中ご執筆いただいた方々に心より感謝申し上げます。広報でも取り組みが始まっておりますように、会員相互の研究情報交換などにニューズレターが少しでもお役にたてるようがんばりたいと思っております。(Y)

【訂正とお詫び】ニューズレター25号の『院生組織の活動』の執筆者が巴山岳人氏となっておりますが、これは巴山氏と佐々木郁子氏の共同執筆になるものでした。ここに訂正し、関係の方々には心より深謝いたします。(編集委員会)

**【発行】**

ASLE-Japan/文学・環境学会  
代表 村上清敏  
事務局:新潟県立大学 小谷一明  
〒950-8680 新潟県新潟市東区  
海老ヶ瀬 471 番地  
Tel:025-270-3351  
Fax: 025270-5173  
E-mail:kodani@da2.so-net.ne.jp

**【編集】**

編集代表 横田由理  
〒739-0321  
広島市安芸区中野 6-20-1  
広島国際学院大学  
E-mail:yokota@hgk.ac.jp

